

夜の散歩道

大学宗教主任
福嶋裕子
FUKUSHIMA YUKO



理工学部でキリスト教概論を教えるようになって初めて、中世の頃までの具体的な宇宙のイメージを調べてみた。私の知識はまだまだ足りないが、非常に興味深い。科学的には誤りでも、想像してみると面白い。

むろん、丸い地球が宇宙の中心にある。その周りを一連の透明な球体を取り囲んでいる。この球体が、一般に「天球」または「天」と呼ばれるものである。最初の七つの天球それぞれに一つの輝く天体が固定されている。それらは、月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星の「七惑星」である。土星の天球を超えると、「恒星天」がある。この天球には、現代でも「恒星」と呼ばれる、すべての星が属している。恒星と呼ばれる星は、相互の位置関係が不可変だからであ

と理解していた。一日に四十マイル(約六四キロ)の割合で上方に旅したとしても、八千年かけても恒星天に到達できないと、言われていた。これは単なる大きさの問題ではない。現代の私たちは、地球が小さいと知っても無感覚だ。なぜなら、宇宙のどこもかしこも相対的にいえば、小さいからである。しかし中世の宇宙像には、絶対的な基準があった。一番小さい地球にいて、はるかに続く、より大きな天球を見上げていることになる。中世の人々の感覚において、宇宙に目を向けることは、燦然と輝き、しかもそびえ立つ巨大なビルを見上げるようなものだった。しかもその巨大な摩天楼のごとき天球は、規則的に大規模の回転運動をするのである。その回転は、まず神から原動天に伝えられ、秩序正しく、恒星天の回転を引き起こし、その回転が土星天の回転を引き起こし、と次から次に、因果律的な回転運動のうねりが天球に引き起こされる。

地球は、最も小さく、最も暗く、何の輝きも持たず、じつと動かない。そのような地上に生きる人間に、それを近くで見たなら正視できないほどの輝きを放ち、回転する、超巨大な天体の光は、何の影響も及ぼさないのであるのか？ 中世の教会も、正統的神学者も、天球の運動が、地上の植物や鉱物を始め、大衆の心理状況にさえも、或る一定の力をもって影響を及ぼす

る。その「恒星天」を超えると、「原動天」があるとされる。原動天には、輝く天体は属さない。ほかのすべての天球の運動を説明するために、推論上、置かれたただけだそうである。この宇宙像は、別に聖書に書いてあるわけではない。クラウディオス・プトレマイオス(83年頃〜168年頃)というエジプトのアレクサンドリアで活躍した学者が、それ以前の天文学をまとめたものだ。このプトレマイオスの宇宙が、中世まで続く天動説の基盤である。

では原動天の外には、何があるのだろうか？ この問いは、すでにアリストテレス(前384年〜前322年)も考えていた。「天の外には場所も虚空も時間も存在しない。したがって、そこに存在するあらゆるものが空間を占めるよ

と考えていた。つまり占星術が指摘するような天球の影響力を認めていたことになるが、しかし占星術に対して三つの点において教会は、抵抗した。第一に、占星術が、金儲けの道具となり、社会的な混乱を引き起こすとき。第二に、占星術が人間の自由意志を無力なものとして、決定論を主張するとき。トマス・アクィナス(1225年頃〜1274年)によれば、天球の物理的な影響は否定できないし、肉体に影響を与える以上、その意味で人間の理性と意志に影響を与えることができるが、その影響力は決定的ではないと見なした。賢者であるならば、自分の理性と意志を働かせて、天球が地上に与える傾向性に抵抗することが可能である。しかし大多数の普通の人間は、賢者ではないため、占星術が「当たってしまう」ことになる。第三に、占星術が惑星崇拜に成り下がるとき。アルベルトゥス・マグヌス(1193年頃〜1280年)は、当時の農業の慣習として、惑星の象形文字を刻んだ板を農地に埋めるのは許容した。しかしそれを用いて祈願することは、禁止した。これは惑星が、異教の神々の名前と呼ばれていたからである。たとえば、土星はサトゥルヌス、木星はユピテル、火星はマルス、金星はウエヌスである。

光り輝く諸天球と地球の境界は、月の天球である。月は、アイテールと空気の境界、「天」と「自

うな本性を持たないし、時間がそれに影響を与えることもできない」。要するに、天の外は、時間と空間の制限を受けないが、非存在でもない、という答えしかない。だが、この哲学の限界は、キリスト教には歓迎された。「天の外」こそ「天そのもの」であり、それは「神にみちている」と考えることが可能だからである。物質的宇宙の終わりにあるのは、物質を基準とした論理では崩壊してしまう。ダンテは物質的に把握可能な天球の外を文学的に「純粹な光のなかに、愛に満ちた智の光の天」と形容した(『神曲』天国篇三〇歌三八行)。

中世という時代は、暗黒の時代ではない。一般大衆の想像力においてさえも、広大な宇宙の大きさと比べて、地球は「点」のように小さい

然」の境界となり、必然性の領域と偶然性の領域、朽ちないものと朽ちるものの分かれ目と考えられた。天体からの影響は、直接に人間に届くのではなく、空気を仲介して働くと思なされていた。

現代人は、宇宙を漆黒の闇とイメージする。だが中世の人々は、地球の昼の明るさは、太陽から来ている以上、月より上の世界は、地球の昼よりもさらに明るいと思像していた。地球は動かないのだから、夜というのは、「地球が投げかける円錐状の影」ということになる。夜空が暗いのは、われわれ地球の影をとおして、諸天を見ているからである。諸天は、昼よりも明るい光に満ちた、暖かい、天球の回転が発する(と古代から考えられた)和声の調和に満ちた音楽がひびきわたる世界ということになる。

さて私は、中世までの宇宙像の方が現代のそれよりも良かったというために、これを記したのではない。ただ、一見荒唐無稽に見える中世の宇宙像にも、その時代が積み上げてきた知識と心象が反映されており、そのことをそのまま受け止めてみるだけの知解力をもつことは、キリスト教の長い歴史のほんの一端を理解するために必要だと思っからである。(C.S.ルイス『廃棄された宇宙像―中世・ルネッサンスへのプロレゴメナ』参照)。